



東北大学附属図書館報

木這子

BULLETIN OF
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

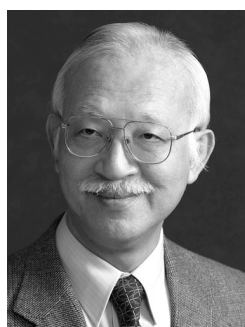
URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>

- 木這子（きぼこ）とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子（こけしぼうこ）-

目	次
○人の輪こそ図書館機能の3つのL..... 1	○東北大学創立100周年記念特別展
○「情報検索の小径」シリーズ 第3回	「学都に息づく夏目漱石の精神 - 仙台の漱石
化学における情報検索 - 過去, 現在,	文庫から - 」開催中.....14
そしてこれから..... 5	○附属図書館の概況.....15
○図書館の思い出..... 8	○会 議.....17
○“ 図書館職員として40年 ”12	○人事異動.....18
○和漢古書整理教室の開催について.....13	○編集後記.....18

人の輪こそ図書館機能の3つのL

医学分館長 柳 澤 輝 行



昨年12月1日より第30代目の医学分館長を拝命しました。佐藤洋前分館長は、人の意見をまとめあげるのが本当にうまく、仕事をこなす力のある方で、その後が勤まるのかと心

配になります。そういえば、先生は2年先輩に当たり、約25年前まで医学部前にあった、「エスペロ」という喫茶店でお見かけしていて、さ

わやかで格好よい人と存じ上げていました。先生が研修医を務めておられた会津の竹田総合病院に五年生の時に見学に行ったこともありまし
た。やはりご縁があったともいえるべきでしょう。そして今、自分は自分なりに精一杯、医学分館長として勤めさせてもらおうと覚悟している日々です。

薬理学者と図書館

医学分館の館長室には、歴代の館長の写真が飾られています。私は分子薬理学分野の教授で

ありますので、大正5年以来、八木精一（第5代）、寺坂源雄（第15代）、橋本虎六（第19代）という歴代の薬理学教授の写真を拝見して、感慨とともに感激しました。これまでの歴代の医学部薬理学教授は総勢8人ですので、そのうち4人の薬理学を専門とするものが分館長に就任していることになります。ほかの分野と比べてあきらかに比率が高いのです。薬理学者と図書館とは何か関係があるのではと考えをめぐらすと、薬理学は病気の治療という応用的な面と基礎医学の研究・教育という面が渾然となっている大変はばひろく面白い分野であるため、薬と病気に関する膨大な資料と、実験研究から離れることはできないことに気づきます。膨大な資料は当然、図書館が蓄積してくれているものです。でも残念ながら薬理学という言葉はまだ一般には定着してはいないようです。文字で説明すると、物理学からの類推で「薬の理屈」のことであるな、と納得してくれます。ところが、それ以上に困ったことは、医学部に薬を研究している分野があるということに驚く人がいることにしばしば出会い、「薬学とどうちがうんですか。」と聞かれ、おおいに驚かされることです。自分の考え方が一般の方と相当ずれていて、専門に相当いかれているのかなと考えたりもします。でもちょっと考えてみてください。薬剤師だけが薬の専門家であればよいなどということが、あるはずがありません。目の前のその患者さんにある特定の薬を用いることが必要で、その際に注意すべき点は何かと医者が考えてくれないければ、むしろ不都合なことがおきことは自明の理であると考えます。

薬理学と作用反作用の法則

図書館の話からは少々遠回りとはなりますが、薬理学がどんな学問か、私のこれまでの活動などと絡めて書いてみます。薬理学とは、病気の診断、治療、または予防に用いられる薬がからだに対して働きかける仕組みや作用と、逆にからだは薬に対して働きかける様子や作用の両方を研究し、薬についての正しい知識を与え

る学問です。前者を薬力学といい、薬物が生体内で「どうするか、何を起こすか」、後者を薬物動態学といい、薬物が生体内で「どうなるか、何になるか」を研究します。人体と薬物という二つの物体として類推してもらうとよいのですが、二つの物体が互いに力を及ぼし合う時に働く法則として作用反作用の法則があります。ある物体が他の物体に力を及ぼすとき、同時に同じ大きさで逆向きの力を他の物体から受ける現象のことです。科学の基礎や原理を踏まえて考えれば当然であり、何を考えどう判断し行動するにしても基礎科学は役立ち、古くならない例といえます。しかしながら、薬理学はきわめて総合色が強いのがあだをなすのか、学びにくい面のある学問です。学生の間では東北大学医学部に限らずほかの大学や医療関係の学校でも「疫病神（薬理学・病理学）」とよばれているようです。でも総合色を逆から見ると、どんな志向の人にも門戸が開かれているといえます。

なぜ薬理学を選んだのか

自分は昭和51年3月に本学の医学部を卒業し、そのまま4月に医学系研究科の大学院生として平則夫先生のもとで薬理学を学び研究し始め、教授となった今も続けています。学生時代からずっと目指しているのは、「薬物開発は未来につながる。この国はいい薬を生み出しいい国であって欲しい」です。日本は平坦な国土に比して人口がきわめて多く、食料とエネルギーを海外からの輸入に依存するしかありません。富を生産して食料とエネルギーを輸入するという方略しかありません。食料とエネルギーを輸入するという貿易のできなかった江戸時代の元禄時代から開国するまでは、全国の人口は約3千万人というレベルを約2百年間続けていました。現在の1/4の人口です。そこで、富を生む手段として新薬の開発と世界中に向けての販売という手段もあると橋本虎六先生にアジテートされました。「薬九層倍」の言葉があるくらい、原材料費に比べて販売価格は極めて高いのです。薬ほど知的付加価値の高いものはそうざら

にはありません。武器を売りつけるのとは違い、人の命を救う薬を買ってもらえるのですから、感謝されることは請け合いです。さらに、医師が一生かかって真にその人の生命を救えたと思える場面は、おそらく多く見積もっても1万から2万例であろうといわれています。それに対して、新薬開発による新治療法の場合には、治療や救命のレベルがこれまでとまったく異なり、もし十分に有効ならば毎日数十人から時には数万人の命が救えることになります。個々の目の前の人を救えるのとは性質は違いますが、けたが違います。例をあげると、心筋梗塞時の不整脈はそのまま心停止、すなわち死に直結します。その不整脈の特効薬であるリドカインにより毎日1万人以上が救命されているといわれています。私が開発に関与した、心臓保護作用を持つ狭心症や急性心不全の治療薬のニコランジルの場合でも、心筋梗塞の予防・救命に比べて少なく見積もっても、世界中で毎日50人が救われています。忘れてはならないのは、人間で用いられている薬物は獣医を介して動物やペットの健康や生命にもよい影響があることです。このように考えて薬理学の道を選びました。

セレンディピティ的発見：カリウムチャンネル開口薬

自分は昭和52年ころ大学院学生としてニコランジル（当時のコード名 SG-75）の作用を調べるために、動脈血で心臓の一部を灌流し冠動脈の血流量と収縮力と電気的活動に対する薬物の効果を検討する血液灌流心標本を用いていました。橋本虎六先生のお弟子さんたちが開発した研究手法です。ニコランジルを冠動脈内に注入すると、冠血流量は増加しますが、心筋収縮力は変化しません。狭心症の治療薬の条件を満たします。投与量を増やしてゆくと、さらに冠血流量は増加し、収縮力が低下しました。さらに高用量では、収縮はほとんどなくなり、なんと驚いたことに心室細動の現象が生じました。ところが、薬物が洗い流されると見事にもとの正常な収縮に戻りました。不思議に思っていました。

たが、冠血流量増加と心筋収縮力減少からみると、ニコランジルの作用機序は当時の流行の説で教室でも提唱していたカルシウム拮抗薬のカルシウムチャンネル遮断機序のようなものかととりあえずは考えました。（人は説明できそうな説に簡単に飛びついて、何とか納得しようとする性質を持つものです。常識や流行はいつも新発見・発想、超越、創発を意識的にも無意識的にも規制しています。）ニコランジルの心臓への作用のプロフィールを見るためにさらに別の標本でも実験をしました。心臓の電気的活動を調べる標本では、ニコランジルは心拍数を変えず房室伝導を遅らせませんでした。思惑が外れてショックでした。カルシウムチャンネル遮断機序では絶対に説明がつかない。心室中隔を養う動脈に高用量注入すると、心室細動を生じ、その直前の細胞外電位で再分極相（心電図のT波に相当）が前に動きました。すなわち活動電位の幅が短縮していることを発見したのです。ニコランジルのカリウムチャンネル開口という、まったく新しい作用機序発見の瞬間でした。アセチルコリンのカリウムチャンネル開口による心房細動発生との類似でニコランジルの心室細動も説明できます。それ以降、作業仮説としてニコランジルはカリウムチャンネル開口作用をもつと仮定すればどのような結果が得られるかと考えて、当時可能な限りの実験系を組むと、すべて結果が予想のとおりでした。これらの新発見に興奮し、研究者を続けたいと心から思って今に至っています。ものごとの本質を探るときに、その歴史的なみなもとに立ち帰ることの重要性を改めて述べる必要はないのですが、人は未来完了形で過去を回想するといわれています。これはセレンディピティの一端を示す、私自身の体験だったと思っています。

ネットワーク理論のスモールワールド

人が何かを知覚すること、考えること、生きること、そして何かを作ること、実は全部つながっていると考えます。ネットワーク理論のスモールワールドの特性は、我々の知識や行動に

も当てはまります。知識は通常ほとんどそれぞれの近場だけを結んでクラスター化し分断化しています。しかし、遠くの知識と遠くの知識がふとランダムに結ばれるような場合には、それまで培ってきた知性や感覚のすべてが一気に同期し、世界の全体イメージをあたかも悟りにも似たおもむきで運んでくるといわれています。われわれの科学技術の進む方向は、オリジナルな手法をていねいに開発し足が地に付いた技術と知見をクラスター化して基盤としておいて、若者の大胆な発想と種々の弱いきずなを起爆剤にするしかないのではと考えます。

3つの生命情報：DNA，RNA，タンパク質
図書館ということで生命の情報に目を転ざると、生物の遺伝情報は基本的にDNAとして、細胞内に保持されています。DNAの情報はmRNAに転写されます。タンパク質の組み立て工場であるリボソームでは、mRNAの情報に対応するアミノ酸をtRNAが次々と運んできて、タンパク質が合成されます。生物に備わったDNA→RNA→タンパク質という情報の流れは「セントラル・ドグマ」と呼ばれ、1960年代に明らかになったのですが、実は生命の歴史ではRNAが最初の生命情報分子であり、原始地球にはまずRNAだけが自己増殖する世界「RNAワールド」があったという考えが最近強くなってきました。さらに、RNA→タンパク質（機能の多様化と利用による磨滅に耐える性質の獲得）、そしてRNA→DNA（バックアップ）が起きたことが種々の証拠から見えてきました。これは生命情報の時差のスイッチングが生じたことになります。情報はしかるべき時にしかるべき場で働いてもらった後は消えてもらう必要もあります。情報は鮮度が命、という性格があるので、簡単に分解されるRNAは目立たなくなりましたが、実はわれわれが考え想像できるよりもずっとずっと複雑で面白い生命の営みを支えるフィールドが広がっているのです。

3つのL：L ibrary，L aboratory，L ink

『木這子』のバックナンバーを見て、あらためて不思議な機縁ともいべき関係性に驚きました。『木這子』の通巻1号は自分が研究者生活に入った時とまさしく同時に発刊されていて、昭和51年4月30日発行となっているからです。このように資料・データをいつでも見られるように継続して保存してくれる図書館機能に感謝しています。もっと驚嘆することは、それがネットを通じて自分のパソコンでダウンロードし、閲覧、コピー可能であることです。本当に隔世の感があります。これまでの大学の知の世界の強みと特徴は2つのLだったと考えています。すなわち、L ibrary 図書館（これは生命情報でいえばDNAに相当します）とL aboratory 実験室（タンパク質）の2つのLです。以前から存在してはいたのですが、現在では「3つめのL」として加わってきたのが、膨大な量の情報を考えられない速さで処理して、関係性を明らかにしてくれるL ink リンクあるいはネットワーク（これはRNAに相当します）、といってもよいでしょう。それでも忘れてならないのはコンピュータネットワークだけがリンクではないということです。人々の信頼、つながり、ご縁、すなわち人の輪こそがもっともっと大切なリンクと考えます。どんなところでどんなことが次への思考のヒントになるかはわからないものですし（セレンディピティ）、どんなつながりが一気に物事を推し進めるきっかけになるかもわからないもの（ネットワーク理論）です。

大学の図書館自身も、これまでの記録保存の機能（DNA）と研究の補助機能（タンパク質）に加え、人の輪や情報の輪を支える機能（RNA）を充実させて行くことが大切であろうと考えます。人の輪を広め強め、3つのLの図書館機能を利用者とともに一緒に目指しましょう。

（やなぎさわ・てるゆき）

「情報検索の小径」シリーズ 第3回

化学における情報検索 - 過去, 現在, そしてこれから・・・

薬学研究科・准教授 廣 谷 功

私は、化学という広い研究領域の中の有機化学と呼ばれる狭い専門的な学問分野で生理活性を持つ化合物の合成研究や新しい反応の開発研究を行っている研究者である。従って、この記事は、決して理系全体に共通した内容では無いはずであり、さらに個人的な意見を述べているに過ぎないということを予め記載しておく必要があると思う。「情報（文献）検索」は、どのような研究分野でも必要なことであると思われるが、それぞれの専門分野において固有の問題が有ると思われるし、逆に共通の問題として認識すべきことも有るのではないと思われる。

どのような領域においても、研究とは、「他の研究者が行っていないことを調査・開拓すること」である。従って、これまでどのようなことが研究されてきたのかということを調査することは、必須であることは言うまでも無い。すなわち、文字通り「温故知新」ということから研究が開始されるべきではないかと思う。アメリカの某有名教授は、時間が空くと必ず図書館で Chemical Abstracts（以下、CAS と省略）を読んでいるという話を以前に耳にしたことがある。当時、今よりももっと未熟であった私は、「どうして新着雑誌より CAS なのだろう？」という思いをした記憶が有るが、こんな思いが浮かんできたのは、私が研究者としての意識が足りなかったためであると反省している。

私が研究室での生活を送り始めて、約四半世紀になろうとしている。研究室の風景は、目新しい機械や器具が増えたということ以外には、以前とそれほど変わらないように見えるが、有機化学はこの間に大きな進歩を遂げてきた。しかし、仮に20年前と現在の状況を比較すると、研究の進歩より大きく異なっているのは、「情

報検索の方法」と「情報量の多さ」ではないかと思えてならない。

現在の状況を論じる前に、以前はどんな状況だったのかを明らかにすべきであろう。二つほど私自身の過去の経験を例として挙げてみたい。

一つ目は、私が博士課程後期の時に偶然予期していなかった反応を見つけた経験に関係した事例である。当時、研究指導をして頂いていた先生から「論文にするためには、この反応が既に報告されているかどうか非常に重要なので、何日費やしても構わないので CAS で調査せよ」という命を受けた。ちょっとの間でも正当な理由で研究室から離れられる喜びで、元氣良く「ハイ！」と返事をして北青葉山分館に出かけて行った私は、直ぐに研究室に戻りたくなってしまった。CAS との苦しい戦いが始まったのである。Collective Index を山ほどワゴンに乗せて机に運び、思いつく限りのキーワードで関連しそうな CAS のページをメモし、実際に該当する CAS のページを探し、もしやと思われる原著を当たるといった作業の繰り返しである。結局、三日間、朝から晩まで戦い続けたが、関連する文献を見つけることは出来なかった。本当に漏れが無かったのかどうか、今でも気になって仕方が無い。

二番目の例は、私がアメリカ留学中の話である。留学先の大学の図書館の中央の長机に分厚い Science Citation Index という本が年毎に並べてあり、学生やポスドクが左から右に移動しながら、熱心にその本を読みながらメモを取っている光景をいつも見ることが出来た。Science Citation Index は、ある論文がその後どのような論文に引用されているかを調査で

きる雑誌であり、類似した文献を調査するためには非常に重宝な本で、恥ずかしながら、私は渡米するまでこの雑誌の存在を知らず、留学中はこの本に何度も助けられた（帰国後に知ったことであるが、東北大学でも医学分館で購読していたようです）。

これらの例は、現在では全て自分の机の上に設置してある PC から行うことが出来る。前者に相当するデータベースは、SciFinder Scholar¹⁾であり、キーワードのみならず構造式や化学反応でも検索が可能なツールである。後者と同等の機能は、Web of Science²⁾で検索することが出来る。しかも、どちらのデータベースからもオンラインジャーナルに直接アクセスし、原著も読むことが出来るようになっている。これらのデータベースは、今では投稿論文は言うまでもなく、卒業論文や学位論文の作成時にも絶対必要であり、実際に実験を行う上でもとても重宝しているツールである。これらのデータベースの導入に御尽力を頂いた附属図書館の職員の方々にこの場を借りて御礼を申し上げたいと思っている。

このように、現在は非常に恵まれた環境で「情報（文献）検索」を行える状況であり、少なくとも以前のように本の山の間に頭を埋めるようなことはやらなくても済むような時代ではある。しかし、便利になったからこそ発生しつつある弊害が有るのも否めないというのが、個人的な感想である。現在の学生は、あまりにも便利なツールに頼りすぎてはいないだろうか？ 原著に引用されている文献を読み、さらにその文献に引用されている文献を探して・・・というような古式豊かな「孫引き」をあまりにも軽く見る傾向があるように思えてならない。たまたまコピーした文献の最後のページに載っている次の論文を何気なく見ていて、実はとても役に立つ論文であることに気がついたというような経験を彼らはしたことがあるのだろうか？ 必要な情報のみを必要な時に的確に入手することは、もちろん大切なことであると思うが、

如何にもアナログ的な「偶然に見つける」ということもとても大事なことにように思える。

研究室の学生に、「こんな反応（条件）はどうだろうか？」という話をする、しばらく後に「SciFinder で検索しましたが、先生が言っていたような条件はありませんでした」という回答がしばしば帰ってくることもある。「SciFinder 依存症」と勝手に名づけた嘆かわしい状況である。「フラスコの中で起こることを自分で考えて、条件を設定してみてもどうだろうか？ 文献に報告例が無いのであれば、自分が最初の例になってみようという気はないのだろうか？」と思わず口から愚痴が出てきそうな、今日この頃である。

（ひろや・こう）



廣谷先生へのインタビュー

Q1. 文献を探す上で特に注意・工夫している点がありましたら教えてください。

データベースを使用する検索は、幅広い情報を入手できるということからも重要であり、ぜひ積極的に行うべきことであると思います。しかし、原著で引用している文献を足場として関連した文献を調査していく方法も非常に重要であると思います。SciFinder Scholar や Web of Science は、すばらしいデータベースだと思いますが、完全にデータをカバーしているわけではないということを知っておくべきだと思います。

Q2. 特にお勧めする参考図書・データベース等のツールがありましたら教えてください。

化学を専門としている学生ならば、SciFinder Scholar はしっかり使いこなして欲しいと思います。また、SciFinder Scholar と相補的なデータベースとして、CrossFire (Beilstein/Gmelin)³⁾ というものもあります。古くから知られている化合物に関する調査の場合には、後者の方がヒットすることがあります。

Q3. 思わぬところから研究に関する情報を得たエピソードがありましたら教えてください。

原稿にも書いたことですが、何気なく眺めていた A3 でコピーした文献の最後のページの右側に載っていた次の論文が、実は実際にコピーした論文よりも役に立つ情報を含んで

おり、実験を進める上で非常に役に立ったことがあります。「検索」が必ずしも一番良い手段ではないという例の一つではないかと思っています。

Q4. その他、学生の皆さんに論文を執筆する上で何かアドバイスをお願いいたします。

修士・博士論文、またはフルペーパーのような長い論文を書き上げるのは、大変な労力が必要です。どこでどのようなことを述べるかというような骨格をあらかじめ箇条書きにしてまとめておくという方法はとても有効だと思います。また、事前にどこにどのような論文を引用するかということをよく考えて、整理しておくということもとても大切なことです。論文を書き上げてから、新たに引用文献を追加するというのは、意外と大変な作業ですので、できるだけ引用文献は、しっかり調査して全部揃えてから論文を書き始めるのが良いのではないかと思います。

文献の管理の方法も大事です。市販の文献管理ソフトウェアは、多機能でワードプロセッサと直結しているものもあり、とても便利ですが、比較的高価なのが難点です。適当なソフトウェアで自分独自の文献データベースを作成するというのも良い手段かもしれません。もちろん、ワードプロセッサで必要な文献のリストを作成しておくだけでも、良いと思います。

本文中のデータベースについて(注: 附属図書館)

- 1) SciFinder Scholar
研究室単位での申請により利用可能。
<http://www.library.tohoku.ac.jp/dbsi/scifinder/>
- 2) Web of Science
全キャンパス内で利用可能。料金負担なし。
<http://www.library.tohoku.ac.jp/dbsi/wos/>
- 3) CrossFire Beilstein/Gmelin
研究室単位での申請により利用可能。
<http://www.library.tohoku.ac.jp/dbsi/crossfire/>

図書館の思い出 - 履歴書風私小説の試み -

情報管理課図書館専門員 菊 地 房 雄

昭和48年の暮、東京大学史料編纂所に就職するため仙台を後にした。業務は洋書目録作成で、様々な言語の図書を手にした。英独仏語くらいは分かったが、オランダ語やポルトガル語は判別が付くのに3ヶ月くらい掛かった。まだその時は非常勤だったので収入は僅か、1日に使えるお金は500円くらいであった。それで正職員になろうと考え、翌年は司書の資格を取るため、鶴見大学の夜間コースに通うことにした。講習は午後6時から3時間で、帰宅後自炊すると夕食は11時過ぎであった。

苦勞の甲斐あって本採用になると（実際は野球と囲碁で採用されたに違いない。）見合いの話が来るようになった。夏休みに帰省すると普段は口数の少ない父が、「将来目減りするから100点では駄目、少なくとも120点でなければならん。」と、傍らの母に聞こえるように諭す。そんな言い付けを規準にすると合格者はいない。初めの5回は慣れないこともあって、あっという間に過ぎた。10回くらいになると段々落ち着きも出てくるのだが、減点法で採点するものだから120点の女性は中々いない。その後回数を重ねると、断られることもあったり、ダブルヘッダーもあったりで、次第に疲れて来て、結局は19人のうち17番目の人と一緒になった。

- 後日談によれば父の見合い相手は30人という。敬服！

昭和56年に東北大学医学分館に着任し、その翌年に長男が生まれた。名前は、仕事柄、図書と雑誌を扱っているので「図誌雄（としお）」はどうだろう？と考えたが、分館長先生に「やり過ぎだよ。」と一蹴されたので、止めた。

医学分館では新館建築に携わり、図面作成や

備品選定、書架割付、図書資料の搬送計画立案などで夜遅くまで仕事をした。ある日、午前3時に帰宅するといつもは開いている玄関に鍵が掛かっている。チャイムにも反応はない。妻は乳飲み子を抱えて眠り惚けているらしい。思案に暮れていると、闇の中に入入りの大工さんの梯子を見つけたので、それを使って二階の窓に近寄りガラスをたたいた。しばらくすると中から「今頃いらっしゃるのはどちらさんですか？」と声がした。二階の窓から家に入ったのはこの時限りである。 - 昭和59年医学分館新館が完成し、そのご褒美なのか、長女が生まれた。従って医学分館新館の年齢はすぐ分かるのである。

医学分館最後の年、図書館職員長期研修に参加した。全国から集まった職員と每晚酒を飲みながら、図書館の将来について議論を交わした。その人的ネットワークは研修後も続き、業務上大変参考になり助けられることがあった。同期生の大半はすでに退職しているが、毎年恒例の会合は今でも続いている。

昭和62年には本館に異動になり洋書目録掛に配属になった。その頃は図書館システム電算化の最中で、通常業務よりSEとの対応で忙しかった。金曜日から土曜日の昼頃まで徹夜で打合せを行ったこともあったが、館長先生からの炊き出しがあったので頑張らざるを得なかった。システムがリリースされると仕様書通りかチェックをするのだが、他人の弱点を見出す才能抜群のためか、SEから「バグ出しの房雄」と恐れられた。また、学内の目録担当者に対して目録システムの説明会を何回も行った。そのお陰でいろんな方々と知り合うことが出来た。

そんな多忙の中でも野球や囲碁を楽しんではいたものであった。特に北大との定期戦、ある年は仙台で、次の年は札幌で、そして3年目は遠征費を貯蓄するためお休み、という3年周期の北大図書館との野球定期戦には、東北大学図書館の総力を結集して臨んだものであった。札幌へ遠征した時、試合後の懇親会で北大の女性職員から挨拶された。見覚えのある顔は、東大の史料編纂所時代に図書館実習でお世話をした、当時北大の女子学生であった。

試合の後は、応援団の女性も含めて旭川を経由して大雪山へ向かった。登山当日、天気は良いものの登るにつれて風が強くなり、旭岳山頂付近では小粒の砂利が頬を打った。とても長い時間は居られないのでそそくさと下山。層雲峡の温泉で一息ついた。

平成2年、初めて係長として赴任した宮城教育大学図書館は電算化前で、手書きのカードで貸出管理をしていた。そのため学生の名前は、特に美形的女子学生の名前はすぐ覚えた。ある時男子学生が図書を返却に来たので名前を訊くと、彼は「ナマエです。」と答えた。再度尋ねると真顔でまた「ナマエです。」と答える。真面目そうな様子なので却って不安になった。数回のやりとりの揚げ句「生江さん」だと分かった。 - こうして学生と仲良くなって行った。

教員や職員とは野球を通じて仲良くなった。教員チーム「ファイターズ」のお相手は、山奥という地理的条件からいつも職員チームで、それに加えて貰った。試合後の懇親会で教員はもとより、図書館以外の事務職員と交流を深めることが出来た。こうしてつながりの出来たお陰で、猛暑の秋田で開催された係長研修の際は自動車に同乗させて貰った。帰りは日本海をゆっくり見たかったので、青春18切符で一人旅をした。

こう書くと、宮教大では遊んでばかりいたようであるが、仕事もちゃんとしていたのである。

電算化も手掛けたし、電算化後はカウンターで遡及入力にいそしみ、1万冊を入力する度にお祝いをしたことを、弁明のため付け加えて置こう。

平成6～8年度の北青葉山分館では自然に親しんだ。春先のカタクリやイワウチワの群落は毎年見ても飽きないくらい見事であった。秋にはきのこ採りに精を出し前任地の宮城教育大学まで足を延ばすこともあった。また、柿の実が熟した満月の夜、3匹のハクビシンが木に登っているのに出くわすこともあった。

7月末の頃であろうか、納涼生ビール会で酩酊帰宅後、タマゴタケの卵を思い出し、夜中に懐中電灯とカメラを持って薬学部へ出かけた。タマゴタケが殻を破って出てくる瞬間を見たかったからである。目当ての地面にはささくれた白い殻が覗いていた。薄暗がりの中、時々電灯で照らしながら見詰め続けた。やがて殻にひびが入り朱色の幼体が見えるようになった。殻の中では激しい細胞分裂が行われているらしく、裂け目の内側の幼体は、段々大きく盛り上がって来ているようにも思えたが、明け方まで観察しても結局傘は開かなかった。

娘がペットを欲しがっていた平成7年、父が他界した。卯年生まれだったので、思い出にウサギを飼うことにした。また、父の名は「房治」だったので「ウサジ」と名付けた。彼の気質は父そっくりで、餌をやるとき以外飼い主のことを聞かなかった。まるで父がウサギの毛皮を被って家にいるような気さえした。 - この年はお葬式が相次いだ。大学の恩師、父方の叔父など計7件に上った。それで葬儀社の人と顔見知りになり、葬儀の要領は大体身に付いた。また、お経の切れ端くらいは唱えられるようになった。

薬学部の温室では珍しい植物が目を楽しませてくれるので、よく訪れた。ある時バナナが生長し房を付けるようになった。それを知った分

館の女子職員が青いうちから「バナナが欲しい」と書いたメモをぶらさげて園丁さんにねだった。そのお陰で生まれて初めて採れたてのバナナ 1本の3分の1をご馳走になることが出来た。

相続税を納めるのには苦労した。税理士と相談して自宅敷地を売却することにした。次には不動産屋との交渉が待っていた。関連して自宅新築、仮住まい、引っ越しなど問題山積で、休日はほとんどこれらを解決することに費やされた。

そんな中、平成9年に閲覧第一掛長になった。春先季節の変わり目になると、決まって、かなり癖のある学外者がやって来て、「あの資料を見せろ、この資料も見せろ。なにせ俺は高額の相続税を払ったんだから、その権利があるはずだ。」と注文を付けた。カウンターの女子掛員は落ち着いた様子であったが、彼以上の高額を納めた経験から、対応に動じることはなかった。

平成11年には雑誌情報掛長になり2号館で住み暮らすことになった。事務部長が無類のコピー好きで、新着雑誌を求めて足繁く通って来るのが煩わしかったが、閲覧第二掛とともに七夕飾りを作ったり写真展をしたり、1号館とは別世界の楽園を構築した。－このことが上層部の眼に止まり顰蹙を買ったようで、その後雑誌情報掛が1号館へ引き戻されようとは知る由もなかった。

レクリエーションでは野球部監督を務めた。しかし、昔と比べて職員数も減りスポーツを志す者が少なく、部員集めに苦労した。男と見れば説得し何とか9人集めたが、ほとんどが素人なので野球教室を開いて理論を解説した。そのレクチャーに受講生たちは目から鱗と感激し、敬意の念を抱くようにはなったが、チームは楽天1年目状態で勝利までは結び付かなかった。翌年盛岡に単身赴任すると、数々の栄誉を刻ん

で来た東北大学図書館野球部解散の報が届いた。結果、最後の監督となった。

平成12年春、図書館専門員として着任した岩手大学図書館は、放送大学との合築工事のため周囲には足場が組まれ、全貌は定かでなかった。図書も備品も貸倉庫に保管したため建物内はほとんど空で、事務室はコンクリートをはつる騒音と煤塵でまともに仕事が出来た状況ではなかった。その中で完成後の搬入業務を任されたが、平成元年前後にも東北大学本館2号館の建築に関わったので、苦にはならなかった。建物が完成すると、運送業者に指示するためほとんど休めなかったが、11月によりやく開館することが出来た。

盛岡では、通勤の行き帰りに北上川を渡っていたので、その源に興味を抱くようになった。沼宮内の北方、御堂観音に源泉があるという。自動車は運転しない主義だから自転車で訪れると4時間ほどかかった。その後も何度か行ってみたが、御堂の先の峠を越えれば馬淵川水系となり、母方の叔父が住んでいる八戸へ注いでいるということが分かった。そこでいろいろとルートを調査し八戸行きを決意した。平成15年10月の土曜日午前5時盛岡出発。御堂を午前8時通過、順調そのもの。ところが釜石という部落で道を尋ねると遠回りの旧道を教えられたらしく、とんでもない坂を自転車を押して登らなければならなかった。これ以上高い所はないという地点に達すると一般国道が眼下に見えた。そうしてようやく奥中山峠の分水嶺を越えると後は一瀉千里、どうにも止まらない。馬淵川沿いに一戸、二戸を一気に通過し、金田一で昼食。しかし青森県に入ると、三戸あたりから下りの御利益はなくなり次第に疲労が蓄積して来る。それでも気力を振り絞り、午後3時過ぎ叔父さん宅に到着。実に130km、10時間の旅ではあった。－汗を流しに連れて行かれた五戸の温泉で、叔父が知り合いに「盛岡から55歳の甥が自

転車で訪ねて来た。」と話す声が自慢気に聞こえた。2週間後新幹線で訪八。自転車を回収した。

岩手大学最後の年は「自己点検評価報告書」をまとめて、平成16年に情報管理課専門員として東北大学に戻った。本館では各種委員会や打合せに携わった。また、毎年目録システム地域講習会の講師を担当させられた。目録の実務から遠ざかっていたし、システムも大部替わっていたので、勘を取り戻すのに難儀した。更に、図書館の企画展示「江戸の遊び」では囲碁や将棋を担当した。その際古書などにも目を通さざるを得ず、大変勉強になった。

平成18年8月27日帰宅すると老兎ウサジがすっかり弱っていた。自力では立てない状態なので抱きかかえてみたが為す術がない。夜11時全身を突っ張り「ギイイイー」という声と共に鼓動が止まった。やがて肉が固くなり冷たくなっていった。涙がボロボロ出て来て止まらなかった。集まった家族も皆涙をすすっていた。ウサジは鳴かないものだから、あれは体内に残されたエネルギーの、最期の発露に相違ないと思った。－庭にお墓を造りお経をあげた。享年12歳。父が二度死んだような気持ちになって落ち込んだ。

気持ちが落ち着いた10月頃から、名誉教授の先生方からの図書寄贈の話が舞い込むようになった。また、翌平成19年は本学創立100周年記念行事の宣伝効果もあってか、卒業生から次々と図書寄贈の問い合わせが来るようになり商売繁盛であった。中でも図書館長を務められた金谷治先生の寄贈図書は、半数が漢籍であり整理に不安を覚えていたが、今年からその道に詳しい先生のご指導の下、目録作成も兼ねた研修会が行われることになったので、先ずは一安心である。研修の世話役をしながら講義を聴いてみて、世の中には自分の知らないことがまだまだ沢山あるものだ、と、未熟さを痛感している昨今

である。

以上、振り返ればいろいろとあったが、東北大学創立100周年の年度に定年を迎えられることを幸せに思っている。

(きくち・ふさお)

“ 図書館職員として40年 ”

金属材料研究所図書室 富 田 小 満 子

私が図書館職員になったきっかけは「螢雪時代」(今でもあるんですね！)という受験雑誌の大学案内でした。国立の短大でしかも「図書館」の勉強ができ、将来の就職先として「営利を追及しない職業につける」という、私の条件にぴったりの大学があったのです。両親も快く許してくれて、苦しいながらも毎月一筆したためた現金封筒を送ってくれました。この短大はその後、4年制となり、筑波大学となっております。今では入れなかったと思います。

最初に就職したのが宮城高専庶務課図書係でした。担当の方に「住むところはあるの？」と聞かれて、「決まってないです。」と答えたら、その方が一人の女性に「同居しても良い？」とたずねて、彼女もあっさりと「良いですよ！」と答えてくれました。あっという間に住むところも決まって仙台に赴任してきました。仙台に着いてからは早く職場の様子が知りたくて、同居している彼女について辞令をいただく前に出勤してしまいました。前任者がまだいらっやいまして、研究紀要を各研究室へ配布するのについて回りました。図々しさに、今思い返しても顔から火が出る思いです。高専では、図書や雑誌の受入、分類、閲覧業務等をしておりました。目録カードも統計も雑誌の受付も何でも手作業の時代でした。「ツキを呼ぶ魔法の言葉」で有名な「五日市剛」という学生もよく図書室に来ていました。高専生の活躍を耳にしますと嬉しくなりますし、応援したくなります。工業高専ですので企業に就職する方がほとんどでしたので、公害を出さない仕事人になって欲しいと念じておりました。

高専に31年おまして、宮城教育大学図書館整理係に異動しました。図書系の学校を卒業しながら、目録業務をしておりませんでしたので、

目録業務に専念できたことはとても嬉しく、新任の同僚とともにコーディングマニュアルを見ながら、仕事に集中しました。宮教大には東北大旧教養部時代のものから、青柳文庫の一部など古い図書や教科書がお宝のようにたくさんあり、遡及の方たちと、相談しながら仕事を進めておりました。図書の種類も豊富で楽しい図書館です。時間のあるときはお邪魔してVTRなどみたいなあと思っております。図書館システムの更新の時は、情報処理センターと抱き合わせの契約ということで、NECさんから日本電子計算に変わりました。雑誌のデータ移行がうまく行かず、修正に苦労しました。あっという間に5年が過ぎ、金研に採用になりました。

独法化元年で宮教大を退職し、金研へ採用という形でした。財務会計システムや研究所図書室の専門的業務は難しかったですが、会計の方や図書電子化委員会の先生方、係の皆様のおかげでいただき、何とか勤めおおせたかなととても感謝しております。世界の金研で研究支援の仕事が出来たことは他の図書館にはない貴重な経験でした。図書館の仕事も時代の流れとともに随分変わってきました。附属図書館もまもなく100周年を迎えるということです。昔、授業で図書館の計画は100年先を見据えて考えなければいけないということを聞いた覚えがあります。100年間で改良され続けて来た業務の流れを活かして、利用者はもちろんのこと、職員にとっても働きやすい環境に改善されますことを願っております。

そして、職場で巡り会った皆様々に心よりの御礼を申し上げます。

ありがとうございました。

(とみた・こまこ)

和漢古書整理教室の開催について

平成20年1月、金谷治名誉教授の旧蔵書約5,200冊が、附属図書館に「金谷文庫」として寄贈されました。附属図書館長をも務められた金谷先生の専門は中国哲学・中国思想史ということもあって、今回寄贈された図書のうち半数が漢籍です。漢籍の目録整理は一般の図書とは異なり、図書館員にとってもなかなか容易には行かない業務です。そこで、その道に詳しい萱場健之先生を講師にお迎えし、2月25日から和漢古書整理教室が開催されることになりました。

この教室には図書館職員約15名が参加し、講義で漢籍の目録整理法を学習するとともに、実際に漢籍を手にとってデータ採録を行っております。一口に漢籍といっても、唐本や和刻本漢籍、また、版本や写本などさまざまであり、書名も題箋、本文巻首、版心によって異なります。通常、刊本中心の一般図書を対象にしている図

書館員にとっては、講義が進むたびに新たな知識を習得することが出来、「目から鱗が落ちる」毎回です。－ こうして習熟・蓄積された知識は、単に目録作成業務のみならず、漢籍目録を介しての参考調査や、展示会の解説作成などに反映されることでしょう。

この教室は取り敢えず3月一杯の予定で進められ、最終回には修理・補修の実習を行うことになっています。漢籍目録に関する講習会は受講できる機会が少ないので、受講生一同、新しい知見に出会えることを楽しみにしながら、張り切ってデータ採録に取り組んでいるところです。さしあたりの目標は「金谷文庫漢籍目録」の完成ですが、このような勉強の機会を与えてくださった金谷先生のご遺族の方々や、ご指導くださっている萱場先生に、あらためて感謝申し上げます。次第です。

(情報管理課)



東北大学創立100周年記念特別展

「学都に息づく夏目漱石の精神 - 仙台の漱石文庫から - 」開催中

本学創立100周年記念を冠した展覧会もこれが最後です。仙台文学館主催、東北大学と朝日新聞社共催による標記特別展を、仙台市青葉区北根の仙台文学館を会場として開催しています。約270点の資料を、漱石の生涯や作品世界、漱石と仙台のつながりを紹介するコーナーなどに分けて展示中です。会期中は本学教員による講演や、図書館員による展示解説なども予定しています。皆様お誘い合わせのうえ是非足を運んでいただければ幸いです。



■開催概要

- ・ 会 場：仙台文学館
- ・ 会 期：平成20年 3月15日(土)
～ 5月18日(日)
- ・ 休 館 日：月曜日(休日は開館)、休日の翌日、
第4木曜日
- ・ 開館時間：午前9時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)
- ・ 観 覧 料：一般700円、高校生400円、小中学生
200円
(附属図書館では割引券を配布中です。)

■関連イベント(要申込)

- 1) 講演会 3/20(祝) 13:30 - 15:00
「漱石先生大いに悩む」
清水義範(作家)

- 2) 文学サロン 3/28(金) 13:30 - 15:00
「永日小品のなかの ロンドン」
佐藤伸宏(東北大学教授)
- 3) 文学サロン 4/12(土) 13:30 - 15:00
「漱石と鷗外」
菊田茂男(東北大学名誉教授)
- 4) 文学サロン 4/19(土) 13:30 - 15:00
「夏目漱石とアメリカ文学」
阿野文朗(東北大学名誉教授)
- 5) 文学サロン 4/27(日) 13:30 - 15:00
「さびしい『坊っちゃん』」
仁平道明(東北大学教授)
- 6) 文学サロン 5/10(土) 13:30 - 15:00
「夏目金之助先生の英文学」
原英一(東北大学教授)
- 7) ポエトリーリーディング
4/29(祝) 15:30 - 16:30
「拝啓 漱石先生」
- 8) 展示室劇場
5/11(日) 16:30 - 17:00
「仙台の木曜会」

■展示解説等(申込不要)

- 9) 「漱石文庫資料解説」4/8, 15, 22(火)
木戸浦豊和(東北大学附属図書館職員)
- 10) 「展示解説」4/13(日)
(仙台文学館学芸員)



(閲覧第二係)

附 属 図 書 館 の 概 況

この概況は毎年実施される大学図書館実態調査のうち主な項目をとりまとめたものである。

表 1 は平成15年度～平成18年度の概況，表 2 は平成18年度部局別のものである。

表 1

区 分		平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度
蔵 書	和	1,892,573	1,769,031	1,805,460	1,839,042
	洋	1,822,816	1,844,161	1,866,550	1,887,686
	計	3,715,389	3,613,192	3,672,010	3,726,728
所 蔵 雑 誌 数	和	33,404	34,157	35,023	32,672
	洋	36,952	37,873	38,698	39,613
	計	70,356	72,030	73,721	72,285
年 間 受 入 数	和	41,768	36,907	36,622	33,555
	洋	24,922	23,418	22,553	21,257
	計	66,690	60,325	59,175	54,812
年 間 雑 誌 受 入 数	和	11,924	11,396	11,181	9,281
	洋	7,271	7,072	7,069	7,869
	計	19,195	18,468	18,250	17,150
奉 仕 対 象 者 数	学 生	18,439	17,716	18,552	18,441
	教 官	2,589	2,026	2,643	2,675
	計	21,028	19,742	21,195	21,116
一人当り 奉仕対象	蔵書数（冊）	176.7	183.0	173.2	176.4
	年間受入冊数（冊）	3.2	3.0	2.8	2.6
	図書館資料費（千円）	42.1	43.8	43	46
図 書 館 職 員 数	総 数	135	126	133	129
	専 任	64	62	65	62
	臨 時	71	64	68	67
図書館職員 1 人当り奉仕対象者数		155.8	156.6	159.3	163.6
図書館資料費（千円）		866,268	905,901	913,173	969,699

表 2

部 局		職員数○は定員外職員の内数(借入・副館長・分館長含まず)	蔵書(平成19年3月31日現在)					平成18年度受入冊数					18年度経費					施設(平成19年3月31日現在)					
			図書(冊数)		雑誌(種類数)			図書(冊数)		雑誌(種類数)			図書館資料費			運営費(千円)	座席数(席)	読面積(㎡)	閲覧室スペース(㎡)	収容可能冊数			
			計	和	洋	計	和	洋	計	和	洋	計	和	洋	図書(千円)						雑誌(千円)	その他(千円)	計(千円)
本 館	49 (24)	958,407	583,398	375,009	37,235	21,272	15,963	12966 (7937)	10101 (6799)	2865 (1138)	8151 (3570)	5177 (1345)	2,974 (2225)	46,610	178,948	51,319	276,877	470,545	1,152	18,215	5,706	4,729	1,750,000
	2 (2)	455,160	295,716	159,444				7490 (4325)	5493 (3175)	1997 (1150)				40,403		40,403	4,722	0	68	0	12	5,000	
	2 (2)	108,069	65,200	42,869				2409 (1470)	1771 (1177)	638 (293)				11,440		11,440	6,502	17	200	59	107	28,000	
	3 (0)	278,283	126,807	151,476				4413 (3006)	2116 (1433)	2297 (1573)				43,371		43,371	29,155	24	705	35	540	80,000	
	1 (0)	8,306	8,142	164				1946 (1155)	1939 (1154)	7 (1)				6,231		6,231	0	2	190	11	147	3,600	
館 実	4 (2)	386,234	201,500	184,734				3158 (1283)	2116 (982)	1042 (301)				12,117		12,117	18,790	23	286	46	162	27,000	
	2 (1)	31,094	18,036	13,058				0	0	0				0		0	1,038	4	452	20	400	18,000	
	3 (2)	77,286	20,287	56,999				586 (64)	223 (25)	363 (39)				1,301		1,301	9,713	11	917	86	482	127,000	
	1 (1)	34,160	13,078	21,082				155 (39)	45 (19)	110 (20)				472		472	2,871	16	207	22	127	39,000	
	2 (1)	39,731	11,525	28,206				908 (254)	402 (170)	506 (84)				3,025		3,382	9,301	40	579	86	381	56,000	
関 研	—	5,757	871	4,886				29 (0)	1 (0)	28 (0)				0		0	0	0	4	98	12	35	5,000
	2 (2)	22,415	16,077	6,338				1654 (785)	1105 (545)	549 (240)				5,305		5,305	6,042	0	120	0	110	22,000	
	71 (37)	2,404,902	1,380,637	1,044,265	37,235	21,272	15,963	35714 (20318)	25312 (15479)	10402 (4839)	8151 (3570)	5177 (1345)	2,974 (2225)	170,275	178,948	51,676	400,899	558,679	1,293	22,037	6,083	7,232	2,160,600
	5 (3)	81,070	17,760	63,310	1,398	389	1,009	988 (896)	287 (280)	681 (636)	339 (141)	206 (64)	133 (77)	11,739	37,931	376	50,046	21,014	30	534	154	253	65,000
	76 (40)	2,485,972	1,378,397	1,107,575	38,633	21,661	16,972	36682 (21214)	25599 (15739)	11083 (5475)	8,490 (3,711)	5,383 (1,409)	3,107 (2,302)	182,014	216,879	52,652	450,945	578,693	1,323	22,571	6,237	7,485	2,225,600
中 計	19 (11)	420,892	162,494	258,398	13,337	3,515	9,822	5087 (4910)	2185 (2158)	2902 (2752)	3087 (1744)	1,689 (577)	1,398 (1167)	8,038	154,244	292	162,574	111,301	431	4,476	688	2,384	447,000
	10 (6)	364,265	73,970	290,295	8,241	1,652	6,589	4517 (3678)	1113 (972)	3404 (2706)	2,087 (707)	808 (125)	1279 (582)	11,897	125,446	309	137,652	67,613	248	3,356	1,140	1,310	320,000
	18 (8)	324,183	152,485	171,698	7,366	3,070	4,296	6746 (3426)	3610 (2502)	3136 (924)	1,882 (938)	1,180 (305)	702 (633)	25,833	139,084	4,052	168,969	103,795	348	5,355	2,460	605	295,000
	6 (2)	131,416	71,696	59,720	4,708	2,774	1,934	1780 (615)	1048 (544)	732 (71)	1,604 (398)	1,230 (64)	374 (77)	4,617	44,645	297	49,559	38,349	105	1,279	317	418	136,000
	53 (27)	1,240,756	480,645	780,111	33,652	11,011	22,641	18130 (12629)	7956 (6176)	10174 (6453)	8,660 (3,787)	4,907 (1,179)	3,753 (2,608)	50,385	463,419	4,950	518,754	321,058	1,132	14,466	4,605	4,717	1,198,000
小 計	129 (67)	3,726,728	1,839,042	1,887,686	72,285	32,672	39,613	54812 (33843)	35555 (21915)	21257 (11928)	17,150 (7,498)	10,290 (2,588)	6,860 (4,910)	232,399	680,298	57,002	969,699	900,751	2,455	37,037	10,842	12,202	3,423,600

会 議

学 内

20. 2.13 平成19年度第6回附属図書館運営会議

・協議事項

- 1) 理系新分館の建築基本設計案について
- 2) 規程の改正について
- 3) その他

・報告事項

- 1) Elsevier 社の Science Direct のバックファイル導入について
- 2) 各種委員会委員の交替について
- 3) 第5回学術情報戦略会議について
- 4) 第3回学術情報整備検討委員会について
- 5) 図書館計画WG会議について
- 6) 第4回川内キャンパス整備委員会について
- 7) 本館耐震工事について
- 8) 東北大学創立百周年記念展示実施結果について
- 9) 附属図書館本館開館時間延長案について
- 10) その他

20. 2.14 平成19年度第5回附属図書館商議会

・協議事項

- 1) 理系新分館の建築基本設計案について
- 2) 規程の改正について
- 3) その他

・報告事項

- 1) Elsevier 社の Science Directのバックファイル導入について
- 2) 各種委員会委員の交替について
- 3) 第5回学術情報戦略会議について
- 4) 第3回学術情報整備検討委員会について
- 5) 図書館計画WG会議について
- 6) 第4回川内キャンパス整備委員会について
- 7) 本館耐震工事について
- 8) 東北大学創立百周年記念展示実施結果について
- 9) 附属図書館本館開館時間延長案について
- 10) その他

20. 3.11 平成19年度第7回附属図書館運営会議

・協議事項

- 1) 3館構想及びそれに関連する事務組織再編案について
- 2) 二次情報データベースの購入案について
- 3) 附属図書館本館の開館時間延長経費負担案について
- 4) キャンパス間搬送サービス経費負担案について
- 5) その他

・報告事項

- 1) 調査研究室の活動報告案について
- 2) 第6回学術情報戦略会議について
- 3) 第4回学術情報整備委員会について
- 4) 商議員の構成部局について
- 5) 外部評価について
- 6) S C R E A L 調査結果について
- 7) 学術基盤経費の要求について
- 8) 附属図書館イメージキャラクターの募集について
- 9) その他

20. 3.19 平成19年度第6回附属図書館商議会

・協議事項

- 1) 3館構想及びそれに関連する事務組織再編案について
- 2) 二次情報データベースの購入案について
- 3) 附属図書館本館の開館時間延長経費負担案について
- 4) キャンパス間搬送サービス経費負担案について
- 5) その他

・報告事項

- 1) 調査研究室の活動報告案について
- 2) 第6回学術情報戦略会議について
- 3) 第4回学術情報整備委員会について
- 4) 商議員の構成部局について
- 5) 外部評価について
- 6) S C R E A L 調査結果について
- 7) 全学的基盤経費の要求について
- 8) 附属図書館イメージキャラクターの募集について
- 9) その他

人 事 異 動

平成20年 3 月31日現在

発令年月日	新 職	氏 名	旧 職	備 考
20. 3.31		菊 地 房 雄	情報管理課図書館専門員	定 年
"		佐々木 勝 義	工学分館図書館専門員	"
"		鈴 木 岩 夫	総務課会計係長	"
"		佐 藤 博 子	情報管理課図書情報係長	"
"		阿 部 佳 市	北青葉山分館管理係長	"
"		富 田 小満子	金属材料研究所総務課図書係	"
"		渡 辺 真 澄	事務補佐員（情報管理課図書情報係）	任期満了
"		今 野 美 帆	" （情報サービス課閲覧第一係）	"

編 集 後 記

もうすぐ桜の季節です。長く厳しい冬を過ごして迎える春，北国の桜はとても美しいものです。中でも弘前の桜は格別です。それは長年桜に愛情を持った人達によって，大事に管理されて来たからだそうです。

昔から桜を剪定するということは「非常識」と考えられてきたにもかかわらず，桜を守る匠達は敢えて枝を剪定し，人が周囲を歩く事によって踏み固められた土を掘り起こし，腐った根があればそれを取り除き新しい養分のある土を入れるなど，りんご栽培の技術を取り入れた管理によって毎年見事な花を咲かせています。

東北大学100周年記念展示も多くの方々のご

協力により無事終了することができました心から感謝申し上げます。こうした展示が行えるのも，特色のあるコレクションを収集保存してきた先人の見識と努力の賜です。良いコレクションが形成されていくのは，多くの資料の蓄積と維持管理，そして日々の利用と活用によるものです。

大学の設置から4年後明治44年6月に附属図書館が設置されたので，図書館もまもなく百年を迎えます。北国の桜のように多くの人々の期待に応えられるような質の高い資料群を形成し，すてきな花を咲かせ続けられるようにしたいものです。

東北大学附属図書館報「木這子」 第32巻第4号（通巻121号）発行日 平成20年3月31日

発行人 北村 明久 広報委員会委員長 加藤 信哉

発行所 東北大学附属図書館 〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1 電話 022-795-5911, FAX 022-795-5909

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>